



2017☆(ぴかっ)初街破壊っ♪

灯

「やつほー!!」

街に激震が走る、ビルの窓は勢いよく弾け飛んだり目で分かる幅で歪み、震える。

これが彼女なりの「街への挨拶である」そしてよりによつて彼女は正月に来てしまつた

「みんなあつけおめく！」

ことよろは言わないよ、皆で遊んじやうつて意味では今日はよろしくかもねく」

彼女の名前は宮本六花(みやもとりつか)

とある高校で普通の学生として普通の暮らしをしていた普通の女の子である。

立花は今や日本中の誰もが知る女の子である。

しかしそれは決してアイドルや歌手だから有名という訳ではない、巨大さ故である、そして、巨大化を用いて破壊を楽しむ姿は瞬く間に世間へと広がった。

ことの発端は約10ヶ月前

未確認飛行物体(UFO)の様なものが地上500³ほどを浮遊していると多数目撃情報が入り軍はすぐに警戒態勢に入る。

大きさは約20³ほどの大きさであり誰の目から見ても明らかであった。

何も動きを示さないとはいきや既に彼らは役目を終えていた、地上に降り注ぐ薄黄色の光の中心から女の子が1人降ろされてきた、

しかし彼女の大きさは常人の100倍程の大きさになっており真下の人々は遠目から落ちて来る彼女の大きさに気付かず、反応が遅れたものは下敷きになっていく。ただ降ろす事を終えたUFOはホログラムのようにその場から消え去ってしまった。

降ろされた彼女は既に数100人をミンチにし、

何十棟とビルをなぎ倒してしまった。

もし目が覚めた時に動転して暴れてもらっては困ると軍は彼女の周りを取り囲み、体に国自慢の強度を誇るワイヤーで抑え込む。

これで少し話が出来れば

などと、甘い考えであつた。

「うゝん…」

と、可愛らしく寝ぼけた声で起き上がった彼女は体に巻かれた国自慢のワイヤーはブチブチと引きちぎってしまう。宙を舞ったワイヤーは勢いをつけ人々に襲いかかり逆効果になつてしまつた。

「輪ゴムじゃないんだぞ、嘘だろ…と目を疑う者ばかりで場の雰囲気は固く、重く、明らかに悪くなる。」

「あれ…？ 私…」

と困惑している彼女に軍はすぐさま正氣に戻つてもらえるよう声をかけた

「君ー！ 君の名前はなんだい!？」

急に大きくなつて困惑していると思うが、誤解しないで欲しい！ 私達は君の味方だ

からねー！」

と、軍の一人がメガホンを使ってこれでもかと大きい声で話しかける。

「わ、え!? ち、小さい…何これ? 夢…かな…凄…い…」

と、彼女はやはり困惑するも少しワクワクとした表情になる

「君! 待ってくれ! これは夢ではない! 信じれないとは思いますが現実なのだ!」

(ま、まあ私の夢だしそういう事言うよね…)

ブーツと考える彼女は急に自分の体をポカポカと叩き始めた、でこぴんをしたりグリグリしたり

「うん! やっぱり夢だつ! 痛くないもん!」

軍は彼女の可愛さもあつてどうしたものか…と言った表情で見る

しかし次の一言が地獄の始まりであった

「それじゃ夢の皆には悪いけどこの街で遊んじやうね！ まさに夢だったんだー、巨大化して全部壊すなんて特殊性癡学校じゃ語れなかったからなあ、えへへ」

最悪の特殊性癡が最悪の状況へと繋がった、

軍はすぐに危険を察知したのか一斉射撃と砲撃を始める

「うて！ うてえ！ 彼女に現実ということを教えさせてやれ！ 事の重大さを教えてやれば、少しでも痛みを…」

「あはは！ やっぱり、全然痛くないもん！」

「嘘だろ…」

戦車隊や銃撃隊の絶望した顔が目に見えて分かる、彼女はそれを見て

「あはっ、そんなに落ち込まなくていいよ、夢だから主人公は痛くないものなんだから、それはもうしょうがないよ」

と、まさにこの街の主人公は彼女であった、これ以上無い恐怖を叩き付けられた軍人達は敵わないと悟ったのか我先と逃げていく

「え！　ちよつとちよつと、軍人なのに逃げちやうの!?　だらしなさ過ぎじゃない日本軍隊……」

と、苦笑する女の子

「そうだ、そういえば名前を聞かれてたね、メイドの土産つてやつで聞かせて上げる、私は宮本六花、この世界の主人公ね、覚えといて損はないわ、まあ夢が覚めたらお終いだけど、それまでは私がこの世界で一番の有名人ね」

と、軍隊を初め、ビルや駅を尽く踏み均し人類に絶望を与える六花

彼女が2度目に目を覚ました時

元の大きさに戻っていたが街は赤に染まりと瓦礫の山に埋め尽くされていた。

後に立花含む負傷者達は瓦礫の山から救助隊に救出され、目を覚ました後質問を受けていた

「凄い、あの状況で無傷だなんて……」

君の名前は？ 親御さんは？」

「私宮本六花、たぶん巨大化して暴れてた本人……です……」
！？

場はどよめき驚きを隠せない、銃を構えるものまでいた。

「ひっ！ ご、ごめんなさい!! 違うんです！ ごめんなさいごめんなさい!!」

待て、と銃を静止する者が立花に引き続き質問する

「君もやりたくてやっていたんじゃないだろう…宇宙船から降りてきたと考えると、
操られでもしていたんだろう」

そこで立花は首を振った

いや、振ってしまった

「わ、私、夢だと思って、こんな事ありえないから、楽しんでこうと思って…」

その瞬間乾いた音が響き立花の腕を直撃した。

しかし立花の腕に当たった瞬間上に跳躍した弾丸は勢いを落とし地面に落ちてしまっ

た。

嘘だろ…

は…

え…

と、全員が固まる、撃った本人は心の中で言うことは決まっていた

(遊ぶ感覚で壊しやがって！ 生かしていたら危険だ！ 今すぐ殺さねえと気がすまねえ！)

だがその言葉が出ることはなく、口をぱくぱくと動かすことしか出来なかった

立花は震えていた、恐怖もあるが、どんどん湧き上がる高揚感に

(嘘、私、今何も効かないんじゃない…)

「君！ だ、大丈夫かい!？」

と、駆け寄る軍人に立花は

「今、凄くビックリしませんでしたか？」

「あ、ああ、宇宙のバイオテクノロジーで頑丈になったのかもな」

「同時に恐怖しませんでしたか？」

この子危ないなって、敵視しちやいませんでしたか？」

「!?!?!」

驚愕を隠せず短い息が出てしまう

「やっぱり、私、私最強じゃない…!」

あは！ あはは！」

軍の全員が危険を察知し銃を構える

「いいですよ！ 撃つて！ その玩具で無敵を証明させてください！」

ンンンンンンンンンンン

激しい銃撃音が救助圏内に響く、

なんだなんだと負傷者や手当している者が騒ぎ始める。

立花は無傷だった、確信した

この世界はもう私のものだ。

そこからは立花の思惑通りだった

人は言うことを聞くし壊したいものは壊せる、欲望のまま街を犯す立花はまさに悪魔の権化だった

1ヶ月に一つといったペースで街破壊を楽しむ立花は普段何をしているかと言うと普

通の学校に通っている。

そして遊び感覚で街を壊す、ただその繰り返しである。

それが彼女の日常と化してしまった。

学校の皆も恐れながらも余計な態度を取ると自分が、いや、この街がどうなるかわからないので普通に接している。

そして今年1月1日―

立花はとある街で浴衣姿で遊びに来ていた、そして宇宙船で貰った巨大化能力を使い見る見る間に巨大化していく。

160mほどになった立花を見てどよめく住人、それを見てニヤケが止まらない立花。

「じゃあ新年早々皆さんご存知っ！

街壊ししちゃいまーす！ 初壊しだー！」

と、元氣よく歩き始める立花

足袋を履いて人々を次々とミンチに変えて住宅街をぐしゃぐしゃと押しつぶす足はまさに白い悪魔、ガンダムではないが白い悪魔である。

「あはは、巨大化は何回やつても飽きないわー、皆の反応おもしろいんだもんつ、こ
うやって、ゆっくり壊して…、あ、出た出た！　ね、ね、今見てる君よ君、どう？
今家から出てきたけど家の人でしょ、
どう？　自分の家壊される感想は？」

にっこりとした表情でもうにも残酷な質問をしてくる巨人に畏怖した住人は失禁し、
口を動かせず腰も抜かしていた。
何も出来ない住人を見て立花は

「つーまーんーなーいー！」

もっと大声出して元気に逃げてもらわないと、追いかける側の気持ちになってよく。
まあ、追いかけられる側の気持ちは味わいたくないわよね、残念、選ばれたのは、私
でしたー♪」

と上機嫌に某CMの様な事を言いながら住人をアスファルトごと足袋で踏みしめる立花。

ぐしゃぐしゃと音を立てながら地面は陥没し残酷な足跡を残していく、念入りにぐいぐいと踏み締めて余韻に浸る彼女の表情は着物や髪型もあり高校生とは思えない色気を醸し出す。

「んしょつと。」

と、地面から足を引き抜きニコニコと進撃する彼女、
と、ふとした表情で彼女は思いつく、

「そうだ皆、今日は気分がいいから見逃して上げる！」

住人は目を見開き希望を抱いた、と思つた瞬間に

「はい嘘ー！ あはは！ 純情すぎ！ 可愛すぎでしょ皆！」

と、一瞬で希望を打ち砕く立花。

住人はその立花を見て未だに信じれなかつた、あんなに可愛く冗談を言うのに友達になれない、人を軽々しく踏み潰す、悪魔の象徴などと、現実が信じれなかつた。この10ヶ月彼女の可愛さに免じて踏み潰されてもいいと考える人まで出てくる世の中である。

相当世間は追い詰められていた。

「はあー、面白いなあもう、すつごい喜んでたでしょ今。

ごめんごめん、じゃあ次はほんとにあなた達の願いを叶えて上げる、私は唯一無二、神様みたいなものだからね

じゃあここらへんに集まって、どうやって死ねるか選ばせてあげる、おっぱいでもいいよ、服脱いでち、ちく…び…とか！ えへへ、私優しすぎかも！」

と、完全に自分の欲望を住人に選択肢として押し付ける立花、その可愛さに集まる人までいてしまう、

その間に逃げようとする住人、それは間違いであった。

「あ！ ちよつとちよつと！ 逃げちやダメじゃない！

ごめんね、集まってもらつた皆は後で遊んで上げるから、待つててね」

と巨体を前に逃げる人々をテンポよく踏み潰す立花の足袋、白い足袋はどんどん赤黒く染まっていくが気にせず踏み潰していく。

待て待てー！ と可愛くドスドスンと音を立てて追いかける立花、逃げる側は死に物狂いである。

「よいしょー！」

と、叩き付けるように街に体全体を投げ出し押し付ける、

ガッツシヤアアアアアンー！！

と凄まじい爆音と共に土煙があがり辺り一変は地獄と化した。

遊ぶこと10分ほどで街と人々をを蹂躪し終えた立花は集まってもらつた人々の前まで

戻ってきた。

「ごめんごめん遅くなっちゃった、はあ

でももう疲れちゃった！ あはは、ごめんね！ バイバイ！」

と足を持ち上げた立花の足裏を見て人々は押しあい逃げようと必死になる、しかし20日程の足は何度もそこを踏み潰し続ける、動くものが見えなくなった立花は振り返り壊した街を見る。ニヤニヤが止まらずゾクゾクが止まらず、これからも人の文明を壊すのが楽しみでしようがないのだろう、上機嫌で鼻歌を謳いながら自分の住む街へと帰っていく。

軍はというと、3ヶ月による全力投下を試みたものの傷一つつかない立花を見て諦めがついてしまった、こんな事なら彼女を小さくする薬を作れやら、絶対殺せる兵器を

作れやら、何か企んでいるのだろうか。

しかし立花は気にしない、元の身長の時ですら核さえも通さない無敵の身体に酔いしれていたのだ。

実際彼女は無敵である

そしてそれはこれからも変わらない。

欲望の為に街を破壊し、何もつけつけず、ただ自分のためだけに破壊を楽しむ。

それが宇宙人による地球人抹殺計画もとい侵略作戦だと知っても、立花は遊び続けるだろう、性欲の思うままに。

fn

2017☆(ぴかつ)初街破壊っ♪

発行日 2017年1月30日

著者 灯
<http://www.pixiv.net/member.php?id=8915440>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
